

蹄の痕(四)

○東京佐野昭より上總大原宿久米小代宛

(二月三日)

昨朝君等と別れてから圓太郎馬車の初乗最中一の宮近くへ來ると向から荷馬車に乗た一人の女が來た馬車とすれ違ふ時馬が驚いてはね出したからたまらない奴さん落ると其儘氣絶した馬車を停めて別當やら通りかゝりの人々が寄つてたかつて手當を施したので漸々息をふきかへした夫等の爲め汽車に乗り後れはせぬかと大いに心配したが幸ひ十二時五十五分發に間にあつた夫れから千葉驛で乗り替へて本所に五時に着た直に人力の初乗で兩國へ來ると鐵道馬車が非常に混雜するどうしやうと岩村と相談して居る内一輛極透いて居るのが來た見ると赤い燈りに(上)と記してある直ぐ飛乗て見ると普通のと違つて甚だ美しい是れは一月一日から開業した上等馬車で有る無事に新橋に着いて車を命じて岩村と別れると氣が付いたのは僕の蝙蝠傘だ何處へ忘れたか更に覺がない是れが初忘だ夫れから家へ歸つた所が黒田から封書が來て居て中村と同行で青梅の坂上と云ふ内に止宿して居るさうだ着いた計で未だ散歩もしないさうだが一寸悪くない所ださうだ夫れで廿九日に歸京して三十日に吾々の方へ向て出發する積りだ此日一の宮に早く着いたら大原まで進むと云ふ日割に取り極めたから吾々にも出發を三十日迄延ばしたらどうだと云ふ意味で有る然し此の手紙は僕の出發後に届いたのだからむだになつた

本日正午寒暖計華氏四十八度攝氏九度風無く曇天なり

○大原連より在京會員宛
(二月四日)

二人出て行つた其夜に一人来る
其晝は残つた二人退屈し
昨日今日大原だいぶ寒くなり
夕方に高島どんがやつてきて例のつらにて笑ひけるかな
向ふにて源氏節聞く四人づれ
其ほかに宿屋の下女も附いて來た
大入で樂屋より見る芝居かな
太夫さん田舎に惜しき美人かな
其太夫二八の花の名古屋もの
妹の小さいやつは藝上手
連中の一番姉はまづいつら
其女しやくれ面にて目は太し
其女頬骨たかくたけひくし
其女ほかの美人のお師匠さん
顔かたちまづい代りに歌上手

源氏節一つ置には茶番かな
其歌の調子はとかく分りかね
源氏節乞食の歌の調子かな
義太夫に非ず祭文に非ず源氏節
割合に衣裳持には驚いた
座主どの勝浦邊のひまれふし
お師匠さん尾張名古屋の流れ者
うまいのはちびの役者の顔つくり
村芝居はねて歸れば十一時
はねになり歸る時には雨が降り
十二時に晩飯を食う今宵かな
すき腹に一杯やつた機嫌かな
翌あさは十一時まで眠りけり
おかげにて朝めし一度儉約し
午後からは四人連にて日在ゆき

四人にて海の景色を寫しけり
 北風に手先きこゝゆる濱邊かな
 つめたさに乞食小屋にて火にあたり
 ぢぢばばが柴とりくべてもてなせり
 其二人一貫に足らぬ御禮でうれしがり
 又來ると云て出て行く四人づれ
 藥鐘めが昔し戀しき梅のやど
 四人づれ遂に其處まで引ばられ
 づんくと這入つて見れば梅はなし
 此の春は何處に咲くらん梅の花
 胸の火の燃る思ひの藥鐘かな
 もう居ぬと云つて亭主は嘲笑ひ
 もう居ぬと聞て藥鐘は苦笑ひ
 其代り書生姿の下女ひとり
 兎に角に奥にずらりと坐りけり
 目ざしにて地酒二本を飲にけり

其地酒色は黄色で香なし
 下女答て曰く新酒に非ず二年酒
 勘定を尋ねて見れば十六錢
 十錢の茶代に受取出しにけり
 此の梅見梅見えずして安上り
 漸くに其處をたちいで太陽氣
 歸る途四人連れにて四季の歌
 晚餐に腐れ鯛をば食はせけり
 騒ぎ立て藥鐘ふみぬぎ二度したり
 晚餐の後の出來事不思議なり
 四人連風呂場さがしに出掛けたり
 非愛めが先きも知らずに案内し
 風呂場をばさがして迷ふ四人連
 何事と騒ぎ出したり藝者部屋
 其内に漸く知れた風呂場かな
 おやくと一寸驚く四人とも

よく見れば湯氣の中にはおなほ見え
新花は湯壺の中にしやがみけり
其外に不明のからだ一二あり

おなほめが平氣な面でつんと立ち
其姿智感情にも勝りけり

○黒田より久米宛端書

(二月十五日夜)

例の下繪を今日かいて仕舞ふ積だつたが出来ず明日中に仕上げて明後日の午前に手前の處へ届ける

○逗子黒田より東京久米宛端書

(二月十九日)

今朝十一時五十分の汽車で此處へ來た小代の端書で見ると大原の芝居見物はどうやら皆贊成の様だナア幕はどんな都合だ小代が主任でやるだらう表紙の下繪は鷗外君から使が來たから渡した

○小代よりの廻章

今夜大原連の内三人集つて種々咄の序に來月十二日初午の日に大原竹屋で彼のすべた共が打寄つて芝居をやらかすと云ふ漸から段々日を繰つて見ると當日は丁度土曜日にあつて居るから一夜泊りで連中が打揃つて總見物と出掛けたらさぞ面白からうと思ふ就ては今夜寄つた三人は略相談が付たが成る可く連中の多い方がいゝから一應相談するがどうか氣があるか兎に角幕はあれ程までに頼まれた事だからまさかだまつても置けまい幕をやる位なれば見に行なくては損だらうどうだ

○東京小代より逗子黒田宛

(二月二十四日)

今夜は丁度日曜で朝から雨がじやくと降て晝過迄ぼんやりとして居る所に真中がやつて来てするめをぬぐ處へ水滸が来てストーブで暫らく話して居た所がでんでんを始める事の相談が極つて御苦勞にも飯倉のアンドレ教會の隣迄出掛けて聞合せて見ると兩三日前によした所で大きくじりさそこで又八幡町にあると云ふ事を聞て居るから七八軒聞合せてやつと分つたがそれはそれはなか／＼別嬪でおふくろと二人暮らしでしきりにでん／＼やつて居る最中さ思ひ切つて案内をたのみ尋ねて見ると寄席に出るので夜は出稽古は出来ぬと云ふ譯さ仕方がないから其處を出て又候尊手町迄のたくり廻り又一軒見附たが此れはばゝあで感服しないが先づ其れに頼む事にしたがどうだいたちがいゝから上手になると思ふが

今夜あがつて見たお師匠さんの住居と云ふは不思議な處さ先づこんなものさ

座敷から納戸玄關打ち通し

勝手流しも入れて六疊

裏店の探検は生れて初めてだが不思議なものだなアところが此の狭い内へ晝の間は女の子が十人も詰めかける
と
び

幕は注文したよ

○逗子黒田より東京久米宛

(二月廿四日)

こんな體裁の暮しをやつて居る一昨日などの天氣は實に申分なかつた濱邊の氣持はあんまりよかつたから一番

ポツ流をやつて見たそうすると昨日から雨風き多分東京も天氣が悪いだらうこんなに雨が降つて外に出る事が出来ない時には友達でも居たら又どうにか面白くやる工夫もつくだらうにと連中が戀しくなる天氣の好い時には此處の濱は一寸話せる水の色などは珍らしい青い色で富士の山は正面に見える

『光風』三十二 明治三十九年三月